
蛇に嫁入り

音琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇に嫁入り

【Zコード】

Z0591Z

【作者名】

音琴

【あらすじ】

いつも通りの毎日を過ごしていたはずの私はどこの間違ったのか蛇に嫁入りするみたいです。人と妖怪の少し歪んだ恋愛話、第2です。

大嫌い

なんて嘘

大好きだから

アヤトリ

私は少し……いや、かなり天の邪鬼な性格だ。

大切な人に大嫌いって言つてしまふほどに
思つてることと言つてていることが逆になることが多い。

そんな私でも私を受け入れてくれる大切な友達がいる。

少し天然な神社の跡取り娘の 天道 はなは と

少し怖がりな医者の娘の 涼風 さち の二人だ。

出会いは偶然だつたけど今じゃあ、一緒にいることが当たり前にな
つてゐる。

さちが行方不明になつたと聞く前はこの友情に終わりがあるなんて
信じてなかつたんだ。

その日は、いつもより蛇をよく見かける日だった。

別に山の近くに住んでいるわけでもないけど

なぜか小さい頃から蛇をよく見ていたから珍しくも無かつた。

だけど、その日は

心の中をかき回されるような不愉快な気持ちになつたんだ。

まるで監視されているように感じたんだと思つ。

蛇に監視されてるなんて、可笑しこじと言つてゐるがさ。

もしかしたら自分も。

何て心配していたからそんな風に感じたのかもしれない。

そしてその心配は的中した。

色とりどりの

宝石も

価値がわからないなら

ただのごみ

アヤトリ

学校から家に帰っている途中、ふと視線を感じて私は立ち止まつた。
いつもは気にしないのになぜか今日に限つて気になつてしまつたのだ。

人通りが少ない道だからか視線を感じる方を振り返つてみるとすぐ
に誰が見ていたのかわかつた。

そこにはニヤニヤと笑う男の人人がいた。

ぞわりと不快感が心のなかに溢れてくる。

その人はこの町の中で明らかに浮いている着物姿で
首に赤い目のような水晶のついているチョーカーをつけている。

その男の人の緑のショートの髪は普通はあり得ない色で染めている

のかも知れないな、と心の中で思った。

全てにおこでじか人と違う彼。

私が何より嫌だったのは蛇と同じ鋭い金の目で私を見ていたことだ。

「何か用ですか？」

駄目だとわかつていても問い合わせてしまつ。

男の人は気味悪く笑つたまま

「あんた、無防備だつて言われない？」

逆にそう聞き返してきた。

馬鹿にされた氣分だつた。

まるで今、自分がここにいるのは間違つて言われた氣がした。

こんなことならさつわと帰ればよかつたと思ひながらその男を睨むと

「俺みたいな怪しい奴に声かけられたら普通、走つて逃げねえ？」

大きく一歩ひきしめて足を踏み出して男は言つた。

ビクッと体が強張つたが強がつて

「べ、別にあんたくらいならすぐ逃げるもん

やつぱりこじまつた。

可愛がつて

可愛がつて

いたぶり

遊ぶ

アヤトリ

「べ、別にあんたくらいならすぐ逃げれるもん」

そう言ってからすぐに後悔した。

男と女の力の差や体格の差から私が逃げられるわけなんて無い。

今、走つて逃げたならまだ助かるかもしれないけど

足がうまく動きそうになかった。

何で素直になれないんだ。と心の中で自分を叱りながらも私は相手を睨むのをやめなかつた。

男は距離をゆつくつめしていく。

私が強がつてこむ」となんて男にはわかつわった事じくへじく

私との距離を一、二歩でつめられたほど近くなつたとき

男は少し呆れたよう

それでも笑顔のまま言った。

「あんたつて馬鹿だよね。こんなときは誰かに助けを求めなきや、すぐになんづけられちやうよ~」

そんな風に言われてから私はふと思つた。

わざわざから男の言葉が私を心配しているようにしか聞こえないのは氣のせいだらうか、と。

そう思つて考え込んでいたせいか、私は男に何も言わなかつた。

男は何も答えない私を不思議がつたが、そこにはふれずに続けて言つ。

「この頃、蛇をよく見かけるだろ? あれはあんたを見るためだつたけど気づいてなかつたら」

まるで、男がその蛇に命令していたかのような言葉に私は眉をひそめる。

男は気にせず、笑っていた。

「馬鹿らしい。あなたの話には付き合いません」

出来る限り冷たく聞こえるように私は男に言ったが

男は私がそう言つたのをわかつていたかのようだ

すぐに言葉を返してきた。

「駄目だ。あんたは俺の花嫁になるんだから俺の忠告は聞け」

子供に言い聞かせるような聲音でそう言つた彼を

私は信じられない思いで見た。

誰が、誰の花嫁だつて？

聞き間違いかと思つたが男は言い直すこともせずに笑つたまま。

私は本当に厄介な人に関わつたらしい。これは詐欺か何かだろうな。
とそう決めつけて

私は心の中でため息をついていた。

その出会いが私の平凡だった毎日を変えるなんて
誰が想像できるだろうか。

可愛い子よ

その身に

鎖を巻き付けてしまいたい

アヤトリ

私は心の中でため息をついたけど

男は私が全く信じていないことに気づいたらしく

私の目の前でため息をついた。

「知らない奴にこんなこと言われたら普通は信じないだろ？
……ああ、もう説明すんのもだるい」

ぐしゃぐしゃと自分の髪を搔き鳴らしながら

男は本当にめんどくさいに言った。

まるで、私が悪いみたいな言い方に少しカチンときたけど

私が何かを言う前に男が私に近づき私の手を握った。

男が力を込めているせいか握られているところが痛い。

「黙つてついてこい。おとなしくしてれば危害は加えない」

ホソリと低く呟いた男の声に私ははじめて恐怖を覚えた。

さつきまでの優しい雰囲気はもつかつた。

大丈夫

安心して

君を殺すことはないから

アヤトリ

男に引つ張られて呆然と歩き続けていると

男はある森の方に歩いていっているんだとわかった。

その森は通称、日落の森と呼ばれるといふで

綺麗な紅葉が有名などいふ。

だけど、古くから妖怪や幽霊ができる場所としても有名などいふだつた。

あの森に入つてもいいことなんて一つもないよ。

と、よくお婆ちゃんに言っていたのを思いだした。

私はこれでもお婆ちゃん子だ。一回も好きとか、ありがとうとか言えなかつたけどね。

お婆ちゃんが『J』とは絶対という私の中のルールから、あの森に行かない=『J』の男から逃げるが一致する。

この手を振り払って逃げなくちゃと必死に手をはずすとしたが力が強くて振り払うことができなかつた。

だんだん怖くなつてくる。

どうして男はあの森に入ろうとしているのかが、わからない。

全くわからなこよ。

頭の中でぐるぐるといろんな憶測が現れては消えてを繰り返している。

だけど、声に出す『J』とはできなかつた。

結局、私は何も言えないまま

男と一緒に山に入つていつたのだった。

出会ったのは

こんな場所で

会つことは

ふさわしくない友

アヤトフ

山の中は薄暗く、どこか別の世界に足を踏み込んでしまったかのように思えた。

木々が風のせいで揺れ動き、生きているようにも見える。

そんな森の中を男に手を引かれて歩き続けていると

とても大きな木がある場所の前で急に男が止まった。

そして、警戒を含んだような声で木に向かつて言ったのだ。

「……向のよつだ、白梅」

と。どうこうとかわからず首をかしげていると

「ふふ……やつぱり、ばれてましたか？」
と、木の方から返事が返ってきてやつと木の後ろに人がいるのに気づいた。

ぐつと男の手を握っていた力が少しだけ強くなつた。

いつたい、この二人の関係はなんなのだらう。と、一人、心の中で思つのだつた。

「邪魔しに来たのか？俺から花嫁を奪つ氣か？」

怒りを含んだ低く聲音に私の方が恐怖を覚える。

だけど、白梅と呼ばれた人は平氣そうな声で答えを返していく。

「ええ、邪魔しにきましたよ。僕はあなたが、どんな花嫁を迎える入
れても構わないと思っていたんですが、さちの友達である橘ゆうこ
が来るのは思わなかつたもので」

今、たちつて言つた？

「どうここに」と？」

つい、呟いてしまった。

さちがここにいるなんて全く、思つてなかつたからだ。

そんな、私の呟きを無視して木の後ろにいる人は言つ。

「橘ゆうじ、今すぐここから立ち去りなさい。あなたはまだ、こちらには来ていない」

それが、どう意味なのか私にはわからないでいた。

蛇と鬼が喧嘩をすれば

すかさず

狐がやつて来て

彼らの仲を取り持つ

アヤトコ

「橘ゆうじ、今すぐここから立ち去りなさい。あなたはまだ、こちらには来ていない」

それが、どう意味なのか私にはわからないでいた。

突然言わされたからではなく本当に意味がわからないでいた。

だけど、男には意味がわかっているらしく

逃げるなよ、とでも言いそうな田で私を見ている。

そもそも、私の手は男に握られているから逃げようとも逃げれるわ

けがない。

私が何も答えないせいか

嫌な静寂がその場を支配し始めた。

その時、りんつと聞きなれた鈴の音が聞こえたかと思つと

「娘っこが困つていいだろ。離してあげなよ」

隣にいる男でもなく、木の後ろにいる人でもない声が聞こえてきた。

声のした方に目を向ければそこに狐面をつけた黒髪の青年が立っていた。

「……琥珀」

男が呟く。

それはいろんな感情を混ぜ混んだような聲音だった。

白梅さんは暫く、黙つていたが

「何しに來たんですか？琥珀」

男とは違つたりイラしたような聲音で突然現れた黒髪の青年に言つた。

そういえば、先程から木の後ろにいる人だけは姿を見ていない。

木の後ろにいる人も彼らと同い年くらいの青年なんだろうか。

そう思いながら答えを聞くために琥珀と呼ばれた彼を見た。

表情は狐面で隠されているせいわからない。

だが、狐面の青年は諦めたような聲音でこいつ答えた。

「お前の嫁御が逃げ出したらしい。それを言いに来たんだ」

と。その言葉にさわりと空気が変わった気がした。

はじめて足を踏み入れた

その場所にあつたのは

見つかるわけがないと

思い込んでいたもの

アヤトフ

「お前の嫁御が逃げ出したらしい。それを言いに来たんだ」

その言葉にぎわつと空氣が変わった気がした。

私の気のせこではないはずだ。

「やうですか」

空氣を変えた原因だらひ田梅さんは淡々としゃべる。

あまりにも、感情なく呟いたことに私が首をかしげやくなつてい

ると

「ゴシ」と重々しい音が響いた。

びくつと心臓が飛び跳ねた気がするほど驚いてしまった。

そんな姿を見せたくなかつたから、すぐに冷静を装つたけど。

だけど、私がびくつとしたのに男は気づいたらしく

優しく微笑まれ

「大丈夫だ。安心しろ」

そう言われた。

そんな私達のことなんか気にせずに田嶋さんは

あいつと舌打ちをして

「いじたなことになるんでしたら鎖をつけてこねばよかつたです。それとも、橋ゆうこがいじに来るかもしれないと言つたのが間違いだつたんでしょうか」

そつ言いながら、もう一度、近くにある木を殴る。

「ゴシ」と重々しい音がまた響いた。

びくびくしながら

白梅さんがいる方に目を向けた。

「……嘘」

信じられないような気持ちから声が漏れてしまつ。

白梅さんが殴つたあの大きな木は半分以上が消えていたからだ。

「白梅、お前な」

男が呆れたように、だけど、どこか嬉しさを含んだような聲音で白梅さんに言つ。顔は装つ氣もないのか少し、笑っていた。

そんな男の聲音に白梅さんはもう一度、舌打ちをした。

琥珀さんは、そんな一人の様子を見て

ため息をついてから呟ぶよつて

「……蛇我羅」

と、男の名を呼んだ。

この時、私はやつと男の名を知ったのだった。

愛されざるひとと

愛されよいひとは運ひ

愛されよいひとは運ひ

愛されよいひとは運ひ

アヤトコ

「……蛇我羅」

男の名を呼んだ琥珀ちゃんの声を聞きながら

私は男の名を知らなかつたつけ。

と、思つてしまつた。

すでに、この蛇我羅と呼ばれた男を受け入れてゐる自分がいる。

私は惚れやすいし、流れやすい。

まあ、素直になれなくて別れるのも早いけど。

だから、蛇我羅と呼ばれた男を受け入れないとなんてできないと思つ。

人は眞、愛されたいと願うものだから。

「いつまでも、ここにいても意味ありませんね。逃がした責任があるものを殺さないといけませんし、さちを迎えに行かないといけません」

私が物思いにふけていると白梅さんがそつと這つて、森の奥に走つていった。

やつぱり、
姿は見えなかつたけど

草木がかずれる音とかで遠ざかっていくのはわかつた。

「琥珀はどうすんの？」

白梅さんがいなくなつたことに興味がないのか

蛇我羅さんはすぐ「琥珀さんに問いかける。

琥珀さんは少し間をあけてから

「どうせ、止めたって聞かないんでしょう？」

と、答えになつていらない答えを返してきました。

蛇我羅さんはその答えに笑顔で頷くと

「娘っ！」逃げなくなつたらいつでも言へなよ。助けてあげるから

琥珀ちゃんはそのまま残して白梅さんとは違う方向にいなくなつた。

「ようやくいなくなつたかー」

蛇我羅さんは回つを見渡してから呟く。

その声はどこか嬉しさを含んでいた。

「……じゃ、蛇我羅さん？」

わざわざ聞いた名前で彼を呼ぶと

「風刺」

やつ言葉を返された。

それが彼の名前だと気づくのに少し時間がかかった。

「なつ、何で私があんたの名前を呼ばなきゃいけないのよ。」

別に呼んでもよかったですけど、恥ずかしが勝り、つらつらとつづつ
てしまつた。

言つてからすぐ後悔する。

蛇我羅わんの田が怪しげ光ったからだ。

一ヤコと向かを企んだように笑つた蛇我羅。

もひーの母でもあるつたるのもない。

何で、私は素直になれないんだといの時はせつぱつ、やつ思つた。

泣いても

笑っても

君を手放すきはない

アヤトフ

にせにやしながり近づいてくる蛇我羅に少し、恐怖を覚えて逃げようとした私。

だけど、たいして距離もなかつたから逃げる前に私は彼に捕まってしまった。

「生意氣なとこ可憐いけど、あんまり素直にならなかつたらお仕置きな」

楽しそうに楽しそうに楽しそうに彼をきっと睨み付けると

彼はそれすら楽しそうに笑った。

「震えてるのに生意氣」

クスクスと笑つてからぐこつと手を蛇我羅に引つ張られて腕の中に閉じ込められる。

顎を指で上に持ち上げられキスをされるのにかう時間はかかるなかつた。

苦しくなるくらい深くキスをされる。

どんどんと蛇我羅の体を叩きながら離せと訴えても無視をされたいた。

それでも諦めずに何回も叩いていると

ちゅつとコップ音をたてて蛇我羅はキスをするのを止めてくれた。

息を止めていたせいが、酸素が足りなくて、すぐに空氣を吸おうと何度も呼吸を繰り返す私に

蛇我羅は「大丈夫?」と首をかしげて聞いた。

お前のせいだよ。と言いたくなつた私は悪くない。

一回詫びが、私は悪くない。

私の息が整つまで、蛇我羅は私を見ているだけだった。

蛇我羅が何もしようとしないまま一分が過ぎた頃。

なにかにたいし、イライラを感じながら私は息を整えることを止めた。

少し前から息は整つていたけど女心のために長めにやつしていただけだからだ。

ゆつくりと視線を蛇我羅にあわせようとすると、それを邪魔するかのよひに

誰かが私の手を握った。

現れたのは大切な友

一緒にいたのは蛇

追いかけってきたのは鬼

アヤトリ

誰かが私の手を握ったせいでびくっと体が強ばる。

助けを求めるように握られてない手を蛇我羅に伸ばしかけた。

だけど、すぐに

「ゆうじー。」

と、聞き覚えのある声が私を呼んだから動きはピタッと止まる。

それは会いたくて仕方なかつた友人の声。

すぐに私は後ろを振り返り、その姿を確かめた。

嘘じやないと確認しないと信じられなかつたからだ。

そこへいたのは、泣き声になつてこるのかはわからなくて少し、困惑して

どうして泣き声になつてこられるのかはわからなくて少し、困惑して

しまう。

「…………」

彼女の名前を呼んでみた。

……返事はない。

ただ、手を握る力が強くなつただけだった。

いつもと違つてしまふ不安になる。

怪我でもしたの?

どうして、何も言わないの?

なんで、ここにいるの?

何もされてないよね?

溢れてくる疑問。

だけど、口からでたのは

「何、泣き声になつてこのよ。わざとな

心にもないことだった。

蛇我羅の笑つた声だけよく聞こえた。

蛇はにやにや笑い

狐は苦笑いをこぼし

鬼はにじつと笑う

そこににある感情を

皆、知らない

アヤトリ

久しぶりに会った友達に泣いてほしくなんてなかつたから
泣き止んでほしかつただけなのに。

「何、泣きそうになつてんのよ。うざにな」

そんな風になぜか言つてしまつた。

焦る自分がいる一方で子供の自分が囁く。

仕方ないよ。

「これはもう癖になつてるんだから。

」「うう」と皆、私を馬鹿にしようとするとんだもん。

「うだね。馬鹿にされるのは嫌だもんね。

けど、違つ。違つよ。

わちは私を馬鹿になんてしない。
見下したりしない。

「 わい……」

ほり、今だつて心配そつに私を見てる。

謝らなきや。大事な友達だもん。嫌われたくない。

子供の自分がにこりと笑つた気がした。

「「あ、わち。心配してくれてありがとう」」

勇氣をだして、やつぱりわが安撫したように笑つて言った。

「照れてただけなんだから、大丈夫」

彼女は私の性格なんてお見通しのようですね。

完敗。敗北。

そんな気分の中、

彼女が友達でよかつたと、この時、本当に思った。

私達がお互いに笑いあい、会話を始めようとしたその時、

いつまでも蚊帳の外だった蛇我羅がさちの手を振り払い私を抱き締めてきた。

ぎゅっと力を込めて抱き締めてくるせいか

少し、痛い。

顔を歪めた私に気づいたのか蛇我羅が力を弱めてそれでも抱き締めるのはやめないまま言つた。

「白梅の嫁、白梅がこちらに気づいたみたいだが、逃げなくていいのか？」

その言葉はさちを絶望に落とすには十分だったりしく、真っ青になつて焦り始めたさちに

私は事情は知らないけど同情したくなつた。

泣いてもいい

笑つてもいい

怒つてもいい

その感情のさきに自分がいるなら

アヤトリ

そもそも、たちが白梅さんの嫁だといふことに疑問を覚える。

さちには確か彼氏がいたはずだ。

運動部でも人気がある方だつた優しそうな人が。
あの人はどうしたのだろうか。

聞いてみたいが、青い顔で焦つて『さちに聞けるわけがない。

「ど、どうしよう。見つかったら絶対、足枷つけられて牢屋にいれられる……」

ちよつと待て。突つ込みどころがあつたぞ、今の台詞。

足枷つて、牢屋つて、白梅わんは随分、愛が至るでりしあるよつて
で。

いや、しみじみと思つてこる場合じやない。

白梅わんはヤンドレと壁のまつたいだ。

わら、下井したら殺されやうじやないのか。

「逃げよつ、わら」

そつ言つたのは突然だと思つ。

「今まで逃げてきたのなら今わざわざ戻つに行へ」とはできないだらつ
ところのこと、
さちが殺されやうのは嫌だからとこつ思いからでた言葉だつたが

「僕が逃がすとでも?」

私の真横から聞こえてきた怒りを含んだ低い声と

研ぎ澄まされた刀がひきをめがけて投げられたことで私はやつを
の言葉を後悔しかけた。

当たるかもしないといつ思いから、田をつぶつてその痛みを待つ
ていたが

一向に痛みはおとずれない。

そろそろと皿を開くと、見えたのは

刀を素手で受け止めてる蛇我羅の手と

白い短めの髪に赤みがかつた桃色の田で少し幼い顔立ちの男がさち
を抱き締めてる姿だつた。

その顔が青を通り越して白く見えるのは氣のせいだと思いたい。

13 (後書き)

久し振りに話を書いた気がします。

相変わらず成長がない話ですが来年も読んでくれると嬉しいです。

よろしくお年を。

14 (温帶性)

あたましむめどといへじれこめす。

誰が君のそばにいれるかななんて一目瞭然

自分以外が君のそばにいれるなんて馬鹿な思考は

相手に考えさせることも駄目

大嫌いだつて言つことは

無関心じやないつてこと

つまり、好きになつてくれる可能性があるつてこと

アヤトリ

さちの顔が青を通り越して白く見えるのは氣のせいだと思いたい。

白梅さんはさちを逃がさなこと言つように力をこめて抱き締めてる
よつだ。

「さち、さち、勝手に抜け出して悪いのですね。つい、さちの事を
監視させていた者を殺しちゃいましたよ」

さちの耳元で囁いている言葉に私が言わていらないのにも関わらず
ぞわつと嫌な気分になつた。

そんな私を抱き締めながら蛇我羅は

「白梅、場所を選べよ。ゆうじの前で何を言つてゐるんだ。ゆうじが
怯えてるだろが、殺すぞ」

と、言い出した。

空氣読んで、蛇我羅。

お願いだから空氣読んで！

何て願いが届くわけはなく蛇我羅は続けて

「てか、お前嫁に嫌われているとか、笑える」

「いやにも、いやにもやと笑いながら言つた。

その言葉に白梅さんは幸せそうに笑いながら言つた。

「好きの反対は無関心です。無関心じゃないことは好きになる
可能性がありますから」

それは、さちがこれから自分の事好きになると確信しているかの
ような言葉だった。

「確かに。嫌いなら簡単に好きになるな。だが、お前の嫁は嫌悪じやなく恐れを抱いてるから違うんじゃねえか？」

蛇我羅はそれでも馬鹿にしたように笑いながら言ひつ。

さつき

お前嫁に嫌われているとか、笑える
つて言いませんでしたか。

矛盾してると、蛇我羅。

白梅さんはそれには、触れず鼻でそれを笑いながら逆に馬鹿にした
ように答えた。

「耳が悪い人ですね。無関心じゃないってことが重要なんですよ。
どんな感情でも僕に向けられてたらいいんですよ。」

誰かこのヤンデレ止めてください。

と、願うのは当たり前の気持ちだと呟く。

白梅さんを相手にしてくるとそれ助け舟とは無理だと思わずにはいれなかつた。

じつちの水は甘い？

それとも苦い？

あつけつけの水は甘い？

それとも辛い？

いやいや、じつちの水も味はまったくないよ

喉が渴いていないときに水を飲んでも味なんかしないだろ？

ふうふうふう、てくてくと、じたじたと、

歩き回って、走り回って、疲れきって、喉が渴きもった時に飲んだ
水こその甘い

アヤト

白梅さんを相手にしつづけるとそれを助けることは無理だと想わざ
はいれなかつた。

それほどまでに、やぢへの愛が強い。

私が今まで抱いてきた恋心なんてお遊びだと言われるほどに白梅さんの愛は

純粋で、きれいで、それゆえに歪んでいた。

完璧なんて言葉はない。

人には欠点が一つや二つあるもの。

白梅さんにとっての欠点はまっすぐな愛情を抱けないことだらけ。

なんて、冷静に考えてみる。

現実逃避だなんてわかつてゐるけど、他のことを考えていないと

変なことを口走ってしまうそうだ。

今だつて蛇我羅に抱き締められていなかつたら

わらひを離せつと白梅さんに突つかかっていた。

たぶん、いや、絶対に。

「じり、うめさん……」

そんな事を考へていねむらちが小わな声で白梅さんの名前を呼んだ。

その声を聞いた瞬間、白梅さんは女の私より可愛く笑つた。

こんな場面なのに見惚れてしまつへりに可愛く。

さちはその笑顔にひきつった笑みを返していただけど。

白梅さんがさちに構つてゐる様子を見る」としかできない私と蛇我羅。

下手に何かを言へば僕自身の人生は終わりそうなもの。

蛇我羅は知らないけど。

二人して白梅さんとさちの様子を見ていたけど

蛇我羅は痺れを切らしたのか

「おひる、じこにつりまつといづば。俺、もう退屈」

本当に退屈そうに呟いた。

蛇我羅、退屈なのはわかつたけど、状況を考えてお願ひだから。

なんて、口にださないと伝わらな」とわかつていただけど

口にだせるわけもなく。

「俺の家、行いつば」

空氣をあえて読まないのか蛇我羅は平然とそう言った。

泣いた涙が雨に変われば平氣で涙を流せるの。」

知らな^いことを探すなら夜の中で迷つてみたらみつかるかも。

太陽の光が人の手で産み出す^いことができたら、皆、いなくな^ついや
いわう。

皆、皆

できな^いことだから^いか、憧れるんだろ^うナビ

探してみたら^いるかもよ[？]妖怪とか

なんてね。

アヤトリ

「俺の家、行^いけ^ばせ」

その言葉に空氣を読んでくれといつ思^ふいと

どうしようもなく不安になつた。

「つは白梅さんとわちを一人きつにしたままでここのかと言ひつけ。

一つは蛇我羅の態度が急に変わらないかと言ひつけ。

自分の定位位置に入ると人はいつもはできないこととかできちゃつたりするらしい。

つまり暴力とか、無理矢理襲うとか、酷いことを平氣でできるものだ。

蛇我羅は絶対そんなことしない、なんて言えるほど私は彼の事を知らない。

知らない。知らないけど、いや、知らないからしゃ

彼の事を信用しないといけないのかな。

「べ、別に行ってあげてもいいんだからね」

ビーハンデレキャラだよ、自分。

もう……穴掘つて埋まりたい。

むしり誰か埋めてくれ。

返事が思いの外、ツンデレ気みになつて、落ち込みかけたけど

蛇我羅は気にせずに笑つて

「じゃあ、行くか」

と言つてくれた。

スルーされたのに、安心した方がいいのか、不満に思つた方がいいのか微妙だ。

ちやつかり、

「ほひ、お前らもイチャイチャしてないで行くぞ」

白梅さんとせちを連れて来てくれたのには

感謝しても、しきれないけど。

絶対、口に出してお礼なんか言つものか。

いちこち氣づいてくれたことが嬉しいなんて

どこの乙女思考だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0591z/>

蛇に嫁入り

2012年1月8日18時48分発行